

パスカルの《アポロジー》の プラン復元に関して (XXVIII)

竹 下 春 日

29°《結 論》

〔I〕 神を知る二種類の人々。——《神がみずからを隠されたことを嘆くかわりに、これほどまでに、みずからを現わされたことを神に感謝しなければならない。……/二種類の人が神を知っている (Deux sortes de personnes connaissent.)。謙虚な心を持ち、高くとも低くとも、どの程度の精神を持とうと、へりくだることを愛する人々。あるいは、どんな反対に出会っても、真理を見るに足るだけの精神を持っている人々。》 (La. 310-Br. 288)。

〔II〕 神を知ることと、神を愛することとの次元差。——(一) 《神を知ることと、神を愛することまでのあいだは、なんと遠いことだろう。》 (La. 727-Br. 280)。この断章の内容を裏付けるものは、28°《イエス・キリストの証拠》の章中に存在する La. 585-Br. 793である——《身体からの精神への無限の距離は、精神から愛への無限大に無限な距離を表徴する。なぜなら愛は、超自然的であるから。》この fr. に徴するとき、《神を知ること》la connaissance de Dieu は、精神の次元に属することであり、而して《神を愛すること》l'aimer [le—Dieu] は《超自然的》surnaturel であるが故に、両者の間には《無限の距離》la distance infinie があることを、われわれは知りうるのである。

(二) それゆえ《奇跡》の知的確認だけでは、《回心》la conversion は起りえないのである、それゆえ《奇跡は回心させる役には立たないが、罪に定

める役には立つ。……」(La. 729-Br. 825) のである。

〔Ⅲ〕 人間が「神を知る」ということは、この程度に神が自らを現わし、それ相応の光を神が投げ与えるということである。しかし、「高慢な知者たちに」aux sages superbes, 神が自らを現わすことは、決してないであろう。上出の〔Ⅰ〕における La. 310 中の省略した部分は、次のごとく述べている——「そしてまた、神が、かくも聖なる神を知るに値しない高慢な知者たちに、自分を現わされなかったことを感謝しなければならない。」と。またパスカルは、次のようにも叙している、「……もし神が心を傾かせてくださらなければ、人は決して有益な信頼と信仰とをもって信じはしないだろう。そして神が心を傾かせてくださりさえすれば、すぐに信じるだろう。」(La. 230-Br. 284) と。それでは、真の信仰者とは、いかなる人であろうか。

〔Ⅳ〕 真の信仰者のあり方。——(一)「旧新約聖書を読まないで信じている人たちがいるというのは、彼らが全く清らかな心構えを持っていて、われわれの宗教について聞くことがそれにぴったりするからである。彼らは、唯一神が彼らをつくったのであると感じ、神だけしか愛そうと思わず、自分自身だけしか憎もうと思わない。彼らは、そのための力が自分にはないと感じ、自分が神にまで達することはできず、もし神のほうに彼らのところまで来てくださるのでなければ、神との交わりは全く不可能であることを感じる。」(La. 731-Br. 286)。

(二) 「……真の回心は、この普遍的な存在、すなわち、われわれがしばしばその怒りを引き起こし、そのためわれわれをいつでも正当に滅ぼしうるもの前に、全くむなしくなり、われわれは彼を離れて何事もなしえないこと、彼の不興をまねくほかに彼から何ものをも受ける資格がないことを認めるところに生じるのである。」(La. 728-Br. 470)。

(三) 「預言と証拠を知らずにキリスト者になっている人たちを見かけるが、彼らでも、それらのことについて、それを知っている人たちと同じようによく判断する。彼らは、他の人たちが精神によって判断するところを、心情によって (par le coeur) 判断するのである。神が彼らを信じるように傾けられた

のであって、したがって彼らは、きわめて効果的に納得しているのである。／証拠なしに信じているこれらのキリスト者の一人が、自分についても同じことを言うにちがいない不信者を説得するに足るものを持たないだろうということは、私もそれを認めるのにやぶさかではない。しかし、この信者が自分では証明できなくとも、神から真に靈感を受けた (*inspiré de Dieu*) ものであるということとは、この宗教の証拠を知っている人たちが、難なく証明してくれるであろう。》(La. 732-Br. 287)。

[V] 隠れた神について。——(一) 神の隠顕の原因 (La. 315-Br. 557 (167))——《……しかし、神が、神を試みる者にはみずからを隠すということと、神を求める者にはみずからを現わすということとは、どちらも真実である。なぜなかといえ、人間は神を知るに値しないものであるとともに、神を知りうるものであり、その墮落によっては値しないが、その最初の本性によっては知りうるからである。》こうした神の隠れと現われとこそが、《第一部》における人間存在の悲惨と偉大とにかんして、相関的であるのである。

(二) 神の恵みと罰 (La. 734-Br. 584 (353)) ——《世界はあわれみと裁きとを行なうために存続し、人々はそこに神の手から出てきたもののようではなく、いわば神の敵として存在している。彼らに対して神は、彼らが神をたずね神に従うことを望みさえすれば、神のもとに立ち返るのに十分な光を、恩恵によって与えておられるが、彼らがだずね従うことを拒むならば、彼らを罰するのに十分な光を与えておられる。》(a) 隠れた神の恩恵 (La. 733-Br. 848 (352), La. 735-Br. 847 (354))。(b) 隠れた神の刑罰 (La. 724-Br. 518 (349))。

[VI] 宗教の証拠の不確実さ (La. 736-Br. 564 (355)) ——《預言者や奇跡でさえも、すべてわれわれの宗教の証拠は、絶対に説得的であると言えられるような性質のものではない。だが、それらの証拠は、信じるのが不合理だと言われうるような種類のものでもない。つまり、そこにはある人々を照らし他の人々を見えないようにするための明るさと暗さとがある。しかし、その明るさは反対の証拠以上のものであるか、すくなくともそれと同等のものであ

る。そこで、それに従うまいと決心させるのは、理性ではない。そうだとすれば、それは邪欲と悪心以外のものではない。そういうわけで、罪を定めるには十分な明るさがあり、説得するには不十分な明るさがある。それは、それに従う人々に、彼らに従わせているのは恩恵であって理性でないことを明らかにし、それを避ける人々に、彼らを避けさせているのは邪欲であって理性でないことを明らかにするためである。……」。この引用文において、パスカルはキリスト教の証拠が「絶対に説得であると言えられるような性質のものではない」ことを説いておるが、これは「説得的」convaincant ということが、理性的次元を超えているからであり、前出のごとく（〔Ⅳ〕の(三)）、真の信仰なるものは、「神からの靈感を受けた」ことに拠るからである。すなわち宗教の証拠は、理性的次元における確実さ以上に確実であるというのが、パスカルの言わんとするところであり、これは究極的には彼自身の宗教経験に由来するものである。

〔Ⅶ〕 隠れた神の存在の証拠。——「永遠の存在者は、一度存在すれば、常に存在する。」(La. 453-Br. 559 bis (350))。この短断章の真意を理解するには、われわれは12° 「人間を知ることから神への移行」の章中にぞくする一断章 La. 319-Br. 559を顧なければならぬ。該断章は、次の如く述べておる——「もし神を現わすものが全くなかったとするならば、この永久の欠如は両義的なものとなり、人間が神を知るに値しないことを示すとともに、およそ神的存在の存在しないことを示したかもしれない。だが、神が常にではないにしても、時おり現われたということは、両義性を取り去ってしまう。もし神が一度でも現われたとしたら、神は常に存在する。そこで神は存在するけれども、人は神を知るに値しないと結論するほかない。」と。われわれが、パスカルの所謂「隠れた神」Dieu caché の意味を、より深く理会しようとするならば、われわれは更に『パンセ』における一断章 La. 390-Br. 72を参照せねばならぬ。この長断章中には、次の叙述が見出されうる——「しかしながら虚無にまでゆくには、万有にまでゆくのに劣らぬ能力を要する。……この両極は互に離れに離れて行ったがゆえに、ふれあい結びつき、神において、ただ神

においてのみめぐりあう。》かくしてパスカルによれば、二つの究極たる《虚無》le néant と《万有》un tout とは、《神において、ただ神においてのみめぐりあう》se trouvent en Dieu et en Dieu seulement のであり、したがって神は存在と無との《真の根源》le vrai principe (La. 334-Br. 236) としての、《Infini. Rien.》(La. 343-Br. 233) である。そうしてかかる《根源》がわれわれ人間から《はかなり知れぬ秘密のうちはどうしようもなく匿されている》(La. 390) こと、このことが神の隠れの真の意味である。これは別言すれば、知性の対象たる有無の範疇による不可把捉性ということである。根拠は存在と無とを超越しており、これらの範疇によって把握することは、どうしても出来ない。だから《神があるということは不可解である、神がないということも不可解である。》(La. 325-Br. 230)——《理性においてではなく心情において感ぜられる神》Dieu sensible au coeur, non à la raison (La. 225-Br. 278)。以上がじつに、パスカルの神とその隠れの真意である。

19°章以降の論述の経過について

(一) 19°章は、《宗教の基礎と反論への回答》という名称を有しているが、これを広義に解すれば、19°章～29°章のすべてがこの名称で cover しうるのが、実情である。したがって19°章は狭義のものとなるが、実質的には傍証的地位を占めるものにすぎず、核心をなすものは、《宗教の証拠》を構成する20°章～28°章である。そうして更にこの核心的部分の中心をなすものこそ、28°章の《イエス・キリストの証拠》に外ならないのである。

(二) 20° 《キリスト教の道徳》の章は、この宗教の正しさを証するものとして、その数々の長所——神の恩恵、イエス・キリストの隣人愛、および人間の自己否定、神への愛、形式主義の超克、キリスト者の有徳とその幸福の状態等を叙している。

(三) —— (a) 21°章《永続性》において、いよいよ神の存在にかんする証明の準備が開始され、この過程はパスカルの所謂《漸層法》gradationに従いつつ、遂に28°《イエス・キリストの証拠》の章に到達する。次に (b) 21°章

は、ユダヤ民族の古さと永続性及びこれに即したこの民族の保持した書物（旧約聖書）の永続性、就中律法とメシア信仰およびこれらに關係する事柄の永続性を説いている。

（四） 前章に続く22°章《モーセの証拠》は、聖書中に語られた諸事実、諸事件の史実性を立証せんと意図している。そうしてこの聖書記事の確實性を前提として、パスカルは彼の証明方法——イエス・キリストの存在とその宗教的意義を介して、神の存在を証明しようとするもの——を、23° 《この神の証明方法の卓越性》の章中で披瀝するのである。

（五） 24° 章の《表徴としての律法》は、やはり21°章で説かれた聖書記事の確實性を根拠として、象徴主義的解釈法を提唱している。この解釈方法により、聖書の矛盾した記事・難解なる記事はすべて、これを整合的に解釈しうるというのが、パスカルの主旨にはかならない。より具体的に言えば、《旧約と新約とを一度に証明する》ことが、パスカルの意図するところであるが、このためには二個の条件を満たすことが、必要である——(a)旧約中の預言が、新約中で成就していること、(b)預言が《二重の意味》すなわち象徴的意味を有すること、この二つを証明することである。このうち(b)は、本章及び25°・26°の両章で行われている。

（六） 25°《ラビの教え》の章は、ユダヤ人学者（ラビ）たちも、既に象徴主義的解決方法を採用していること、そうしてこの方法により、旧約中に三位一体・原罪・贖罪等の重要概念・思想を継ぎ取っていることを説くものであり、パスカルの解釈方法の正しさを、裏付けようとするものである。

（七） 26°章の《特別の表徴》は、重要意義をもった事柄——《二つの律法、二つの律法の板、二つの神殿、二つの捕囚。》の象徴的意義を、解明している。

（八） 27°《預言》の章は、(五)における《旧約と新約とを一度に証明する》ことの実施である。而してこの証明の最大の核心が、28°章《イエス・キリストの証拠》の提示に外ならないのである。

（九） そうして最後の29°《結論》の章の、言わんとするところの最重要事項の一つは、キリスト教の神がじつに《隠れた神》Dieu caché であること、

パスカルの《アポロジ》のプラン復元に関して (XXVIII)

そうしてかかる隠れた神を信ずる真の信仰者なるものは、神より靈感を享けていること、而して《宗教の証拠》なるものは、理性的のものであるかぎり《不確実》であること、したがって真のキリスト教信仰は、超理性的次元の《心情》的ないし《靈感》的出来事であるという、こうした事柄である。

(XXVIII 回了)